和歌古今集

へ4
4317
2

古今和謌集巻第十一

恋哥一

題しらず　よみ人しらず

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

素性法師

をとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへすけぬへし

紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白浪のあとなきかたにゆく舟も風そたよりのしるへなりける

在原元方

音羽山をとにききつつあふさかの関のこなたに年をふるかな

忠岑

たちかへりあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつ白波

4317 2

秋の田のほにこそ人を恋さらめなとか心に忘しもせん 秋の田の
ほの上をてらすいなつまの光のまにも我やわするゝ
人のみる事やくるしき女郎花秋霧にのみ立かくるらん
あは雪のたまれはかてにくたけつゝ我物思ひのしけき比かな
おく山の菅の根しのきふる雪のけぬとかいはん恋のしけきに

古今和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　小野小町

思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを
うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき
いとせめて恋しき時はむは玉の夜の衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに

下つ出雲寺に人のわさしける日真静法師のたうしにていへりける事を歌によみて小野小町かもとにつかはせりける　安倍清行朝臣

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

返し　こまち

おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつ瀬なれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原敏行朝臣

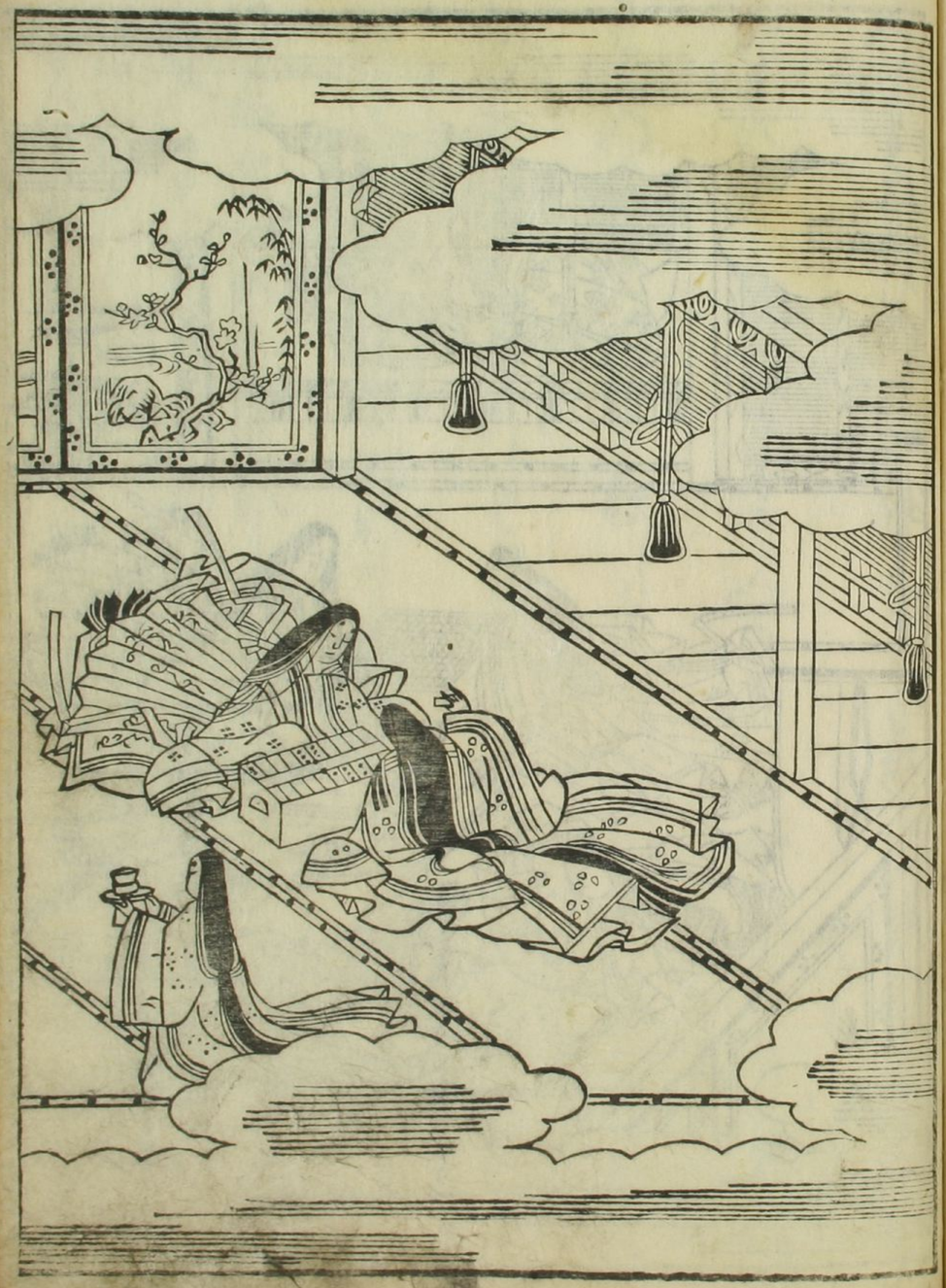
恋わひてうちぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝならなん
住の江の岸による浪よるさへや夢のかよひち人めよくらん

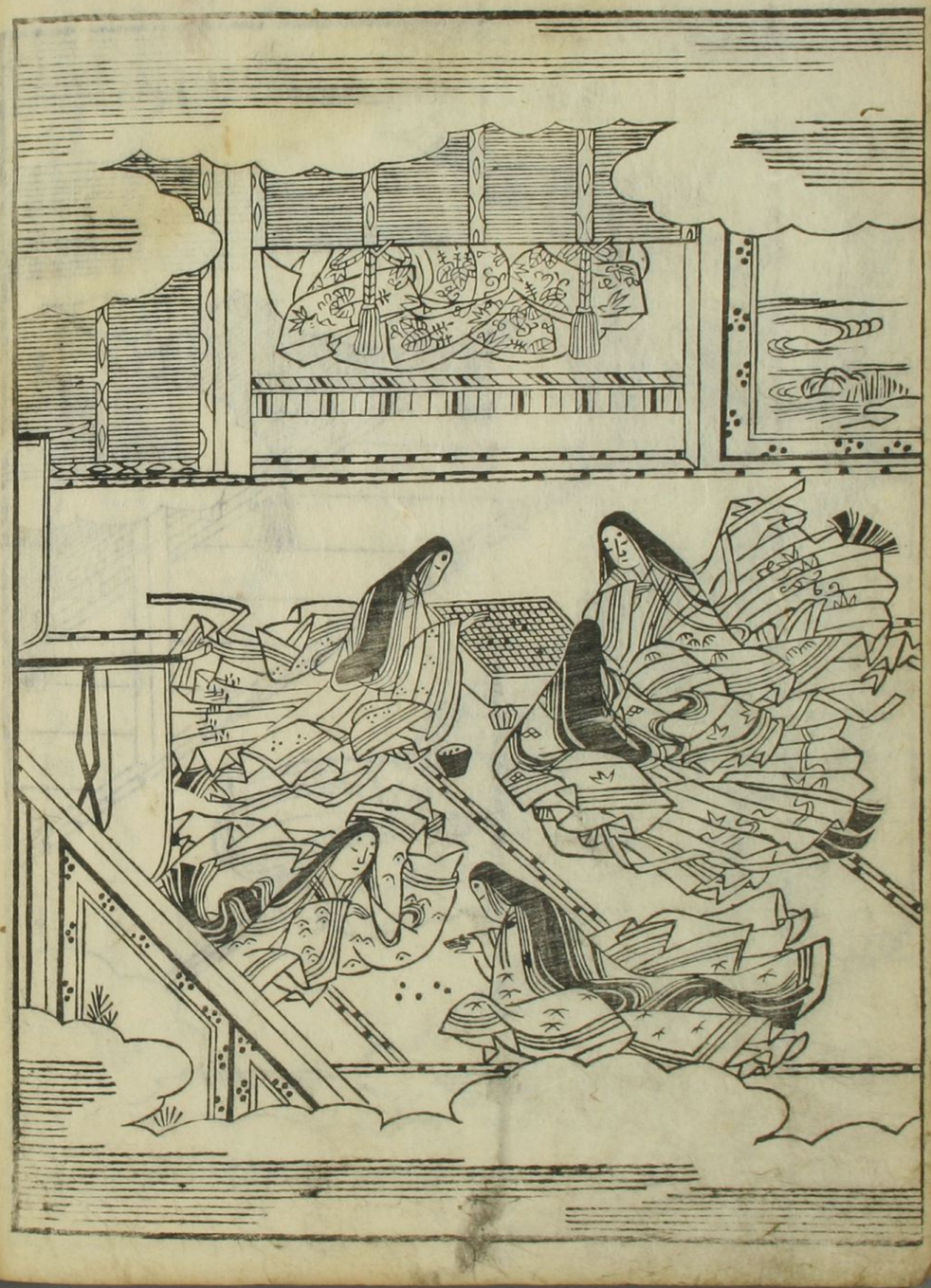
をのゝよしき

わか恋はみ山かくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされる恋もするかな
夕されは蛍よりけにもゆれとも光見ねはや人のつれなき
さゝの葉におく霜よりもひとりぬる我衣手そさえまさりける
我やとの菊のかきねにおく霜のきえかへりてそ恋しかりける





たのめつつあはでとしふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん　みつね

いのちやはなにぞは露のあだものをあふにしかへばをしからなくに　きのとものり

古今倭謌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひて
のちに雨のそほふりけるによみてつかはしける

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ　在原業平朝臣

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける　敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返しよめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへながるときかばたのまむ

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそとほくへだてつれ心は君がかげとなりにき

いたづらにゆきてはきぬる物ゆゑにみまくほしさにいざなはれつつ

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを

此哥は或人のいはく柿本人丸が哥也

秋の野にささわけし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひちまさりける　なりひらの朝臣

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる　小野小町

あはずしてこよひあけなば春の日のながくや人をつらしとおもはむ　源宗于朝臣

ありあけのつれなく見えし別よりあかつきばかりうき物はなし　みぶのただみね

よみ人しらす

風ふけは浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへらなり

此哥はある人のいはく柿本人麿か也

池にすむなをゝし鳥の水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

逢事は玉のをはかり名のたつは吉野の川のたきつせのこと

むらとりのたちにしわかな今さらにことなしふともしるしあらめや

君により我名は花に春霞野にも山にもたちみちにけり

伊勢

しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名のそらにたつらん

古今和歌集巻第十四

恋哥四

題しらす

よみ人しらす

陸奥のあさかの沼の花かつみかつみる人にこひやわたらん

あひ見すは恋しき事もなからましをとにそ人をきくへかりける

つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかに見すはこひしと思はましやは

藤原のたゝゆき

君といへは見まれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆる我恋

伊勢

夢にたに見ゆとはみえし朝な朝な我面影にはつる身なれは

よみ人しらす

石まゆく水の白浪立かへりかくこそは見めあかすもあるかな

いせのあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

とものり

春霞たなひく山の桜花見れともあかぬ君にもあるかな

ふかやふ

心をそわりなき物とおもひぬる見る物からやこひしかるへき

わか身の中に住をゑらみあはせて君か住ことをかくしたまひ

詠しられ　　伊勢

難波によしあしね(?)かくし我をかくし人の心深(?)かまへをまもる哥

山川の絵かよふ人にあはれける人をこれまてつくしぬ　寵

大君の御ゆるしの頼人の情をなくしれはあまりいら哥　さ井の[illegible]さ様

よみ[illegible]しられ

あふ道のはてしも我をかまへんとみてくを心のかくさ海あくもや

おや[illegible]人のひとかたく思ひよめるくをみつらひ

ま[illegible]さみわやはすてらひきれそいそれ人[illegible]

もは[illegible]をさとしくいつまて[illegible]なとはく[illegible]

よみ人　　おなしう[illegible]

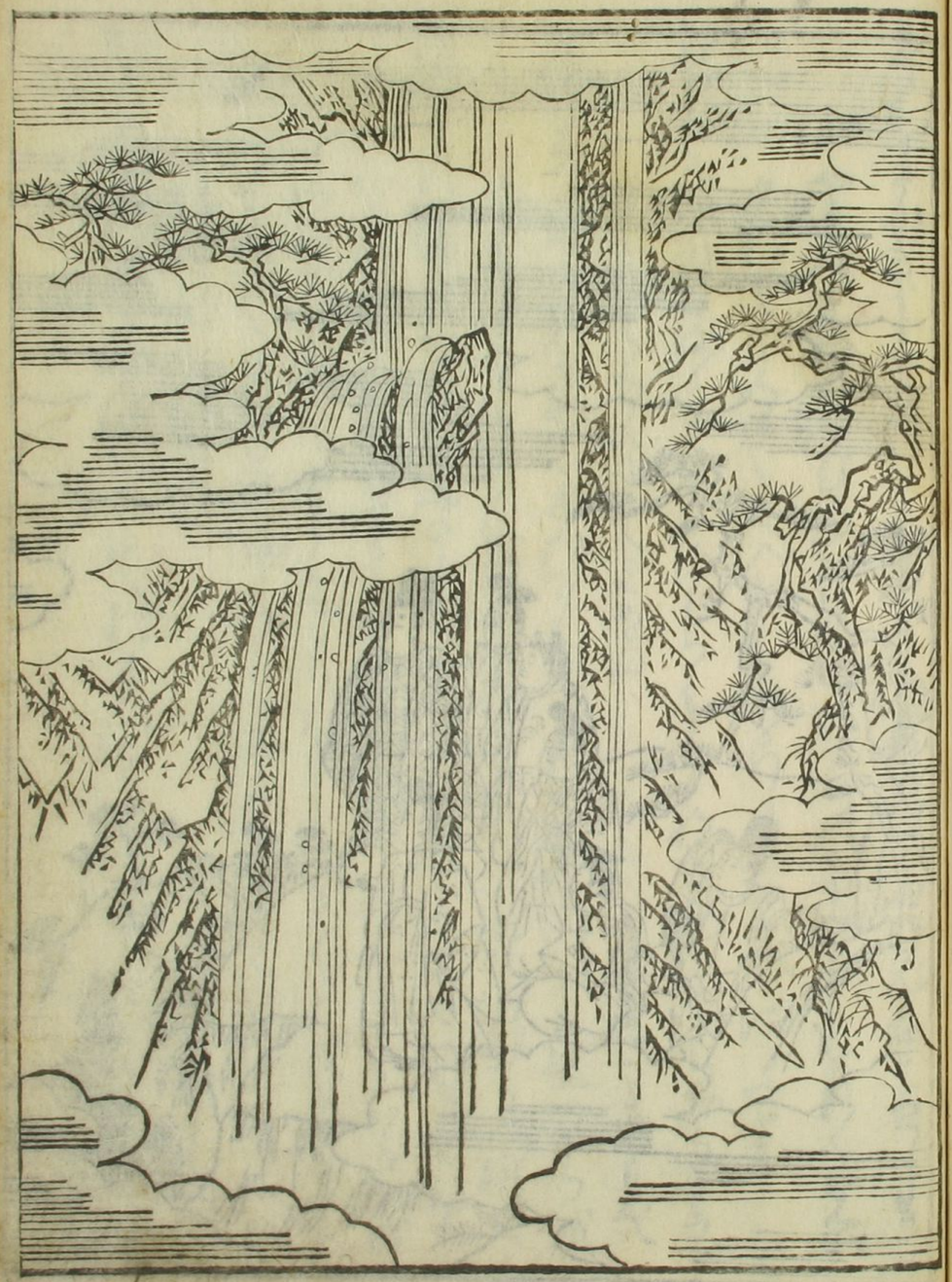
逢まてこのかくさてそとなけ[illegible]波[illegible]ゆく[illegible]成へ

秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしく成ぬと思へは
平さたふん
秋風の吹うらかへすくすのはのうらみても猶うらめしきかな
読人しらす
秋といへはよそにそききしあた人の我をふるせる名にこそ有けれ
わすらるる身をうち橋の中たえて人もかよはぬ年そへにける
又は こなたかなたに人もかよはす
坂上これのり
逢事をなからの橋のなからへてこひわたるまに年そへにける
とものり
うきなからけぬる泡ともなりななんなかれてとたにたのまれぬ身は
よみ人しらす
なかれては妹背の山の中に落る吉野の川のよしや世中

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける時よみける 小野たかむらの朝臣
なく涙雨とふらなんわたり川水まさりなはかへりくるかに
さきのおほきおほいまうちきみを白川のあたりにおくりける夜よめる そせい法師
ちの涙おちてそたきつ白川は君か世まての名にこそ有けれ
堀川のおほきおほいまうちきみ身まかりにける時にふかくさの山にをさめてけるのちによめる 僧都勝延
空蝉はからを見つつもなくさめつ深草の山煙たにたて
かむつけのみねを
深草の野への桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ
藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家につかはしける
きのとものり



古今倭歌集巻第十七

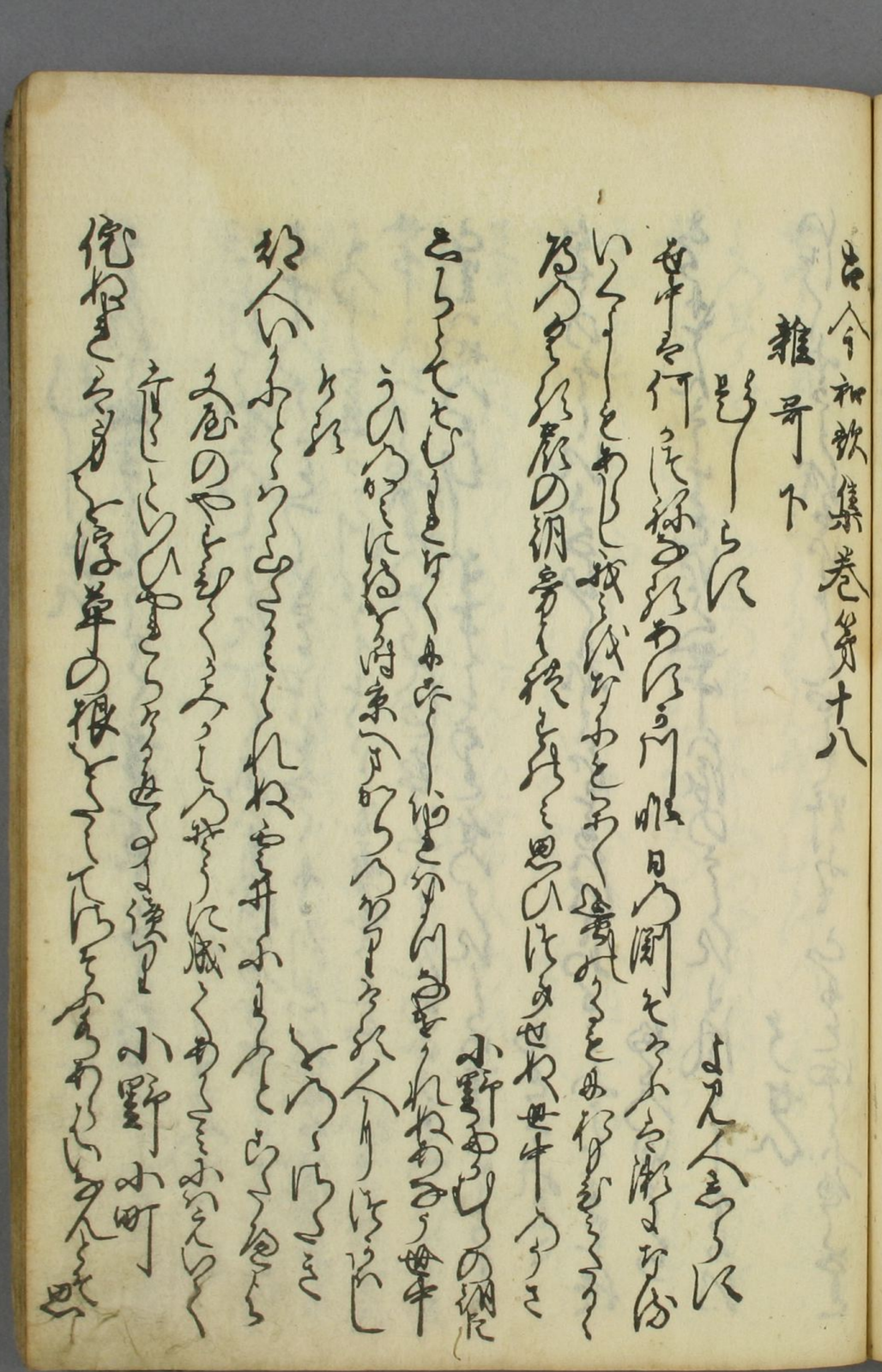
雜歌上

題しらず　　洪人しらず

我うへに露をとくなり天川とわたる舟のかひのしたくも
思ひたれ海とも見ゆ我は唐錦をまくまくにしき掛ふを有なる
うれしなどなりふにけるまんかく夜たりしゆうにそといふ道を
限なく君のこゝろにしたしまれ花は時しもつねをのりけるをかな
あれ君のいとくしかるいさ紀の花はまうらさ也
ひらさ紀の君とりしゆへにひさしの草はみなし夜とそこれ
光のおとうと紀をて侍をうへにうへのきれとをくなて
よみくなるを侍　　なら君の朋に
ひらけ夜れ也こ紀時おもしを侍まの侍草にてつまさらな
大納言藤原のふ山の祢の朋に寧ねしら平納言に成る時にそかね
うへのきねのあやとおくなりてよめれ　　近院右衛門ハ此君

夜れしさへやこれらんひしらぬ紀心ふそあてしを乃紀
いそ乃祢のなむまりけり夜けるへとをくいその祢といふ所に籠り
侍をるとふしらふかう物をこ面にれまれはよろしひいむつ
かれとてよみくけるし家侍　　物る乃いまみら
日乃起ら屋ゆしけ祢いいそ乃祢ゆるほしけゆゆ花を咲なら
二條の皇さ紀乃御さ東夜れとやとむ所とゆのしなる内におかけり
なりし御うて子ゆひなる日よめ歌　　なら起ら乃朋に
わかりや小塩乃山をそふよそ祢世乃しをおとむいけら先
五節の舞姫とてよめれ　　よしこ祢のむしさ
あまり風雲乃かよひ侍吹とらよし女れをとてたりしかるめ世
夜節乃あしゆうんけし乃むのおちさらをとてたるなりん
さやうひこゆよめれ　　河原左乃お須へまし此君
ぬしやくゆまさへと白むいけれくにけらはなくや夜とおとりん
寛平御時よくのさつひ侍をるとのこともうめとそこせく

雑哥下



雑躰
短哥

旋頭哥

思へともえのとらぬ身はいかにたとへしおもふひかし
あひ見てのちの心にくらふれはむかしは物を思はさりけり
わか袖は思ふ人をまちわひてかくなりぬとやおもひける
一なりや梅
思ひきやいくよもかくて思ふ事むなしき月をひとりなかめて
一本よみ人しらす
出てゆく人をとゝめん玉のをのたえはたえねなからへは
紀の国のおしの玉もはたゆとも人もあはてやかくは恋しき
いとせめて恋しき時はむはたまのよるの衣をかへしてそぬる
さかしらに夢の通ひち人めよくらん
あしからぬ人をいのちのかきりとや恋わたる身とたのむはかなさ
年中真
春の野の今日よりかけてわかなつむ袖にかすみの六月にけらし
左京大夫道雅

あらしふく三室の山のもみち葉はたつたの川のにしきなりけり
みつね
雲まよふ夕に秋をこめなからあらしにはなや人まちわたる
雅経
難波かたみしかきあしのふしのまもあはて此世をすくしてよとや
伊勢
すみの江のきしによる浪よるさへや夢のかよひち人めよくらん
よみ人しらす
ゆらのとをわたる舟人かちをたえ行衛もしらぬ恋の道かな
いとせめて恋しき時はむはたまの
くろ
よそにのみ恋やわたらん白雲のたつ山の
さわき
緑なる松にかゝれる藤なれとおのかころとそ花は咲ける

古今和歌集巻第二十

大哥所御哥

おほなほひのうた

新しき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめ万代まてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

あふみふり

あふみよりあさたちくれはうねのゝにたつそなくなるあけぬこの夜は

水くきふり

水くきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけの霜のふりはも

しはつ山ふり

しはつ山うちいてゝみれはかさゆひの嶋こきかくるたなゝし小舟

神あそひのうた

とりものゝうた

神かきのみむろの山のさかきはゝ神のみまへにしけりあひにけり

霜やたひおけとかれせぬさかきはのたちさかゆへき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせよ

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかつらいろつきにけり

陸奥のあたちのま弓わかひかはすゑさへよりこしのひ〳〵に

わかゝとのいたゐのし水里とほみ人しくまねはみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへかけをたにみん

かへしものゝうた

あをやきをかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花かさ

まかねふくきひの中山おひにせる細谷川のおとのさやけさ

この哥は承和の御へのきひの国の哥

美作やくめのさら山さら〳〵にわか名はたてしよろつ代まてに

ちはや振るかもの社のひめこ松よろつ世ふとも色はかはらし

家々称証本之本乍書入以墨滅歌今別書之

巻第十　物名部

ひくらし　つらゆき

そま人は宮木ひくらしあしひきの山の山ひこよひとよむなり

在郭公下空蝉上

勝臣

かけりてもなにをか玉のきても見むからはほのほとなりにしものを

をかたまの木　友則下

くれのおも　つらゆき

こし時とこひつゝをれは夕くれのおもかけにのみみえわたるかな

忍草利貞下

をきのゐ　みやこしま　をのゝこまち

をきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまへの別なりけり

からこと清行下

うめさの　あやもち

うきめをはよそめとのみそのかれゆく雲のあはたつ山のふもとに

これうさいあのそれみかやかくそめとのまちかはく

あくりはたまへかなゆ時よそ見えね

桂宮下

巻第十一

奥山の菅の根しのき雪下

けふ人をこふる心は大井川なかるゝ水におとらさりけり　[illegible]

わきもこにあふさか山のしのすゝきほにはいてすもこひわたるかな

巻第十三

恋しくはしのふにとおもへ　貫之下

いぬかみのとこの山なるなとり川いさとこたへよわか名もらすな

此奇何ぞ人あめれとかとのめてのうつめふてまゝへをと
丑し
うゑめこそまゝ
ふしなれ書れの瀧のとこれこふ人れ思ひへ書ゆるひめやも

巻第十四

おりふてねこのもの也妹とへく下
そせとなもしめれ日とらわくみとしひこそまゝ
ゆるをこうくへきよひからさうふのくをれふるまひうつくしを
深養父恋しといふかゝりをんことなるん下
たらゆる
あたらはたこふをゆうむとみのえれ者りぬふてふ
恋ゆとれくを

古今傳歌集序　紀淑望

夫和歌者詑其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其發永怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌傳謂有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之鳴花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作遠于素盞焉尊到出雲國始有三十一字之詠今反奇之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者受及人代此風大起長歌短奇捷頭混本之類雜體非一源流漸繁雖

猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於
一滴之露至如難波津之什献
天皇富緒川之篇報太子或事關神異或興入
幽玄但見上古歌多存古質之語未爲耳目
之翫徒爲教誡之端古
天子毎良辰美景詔侍臣預宴筵者献和歌君
臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以
隨民之欲擇士之才也自大津皇子之初作
詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之字化
我日域之俗民業一改和歌漸衰然猶有先
師柿本大夫者高振神妙之思獨歩古今之
間有山邊赤人者並和歌仙也其餘業和歌
者綿々不絶及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞
雲興艶流泉涌其實皆落其華孤榮至有好
色之家以此爲花鳥之使乞食之客以此爲
活計之媒故半爲婦人之右難進大夫之前
近代存古風者纔二三人然長短不同論以
可辨華山僧正尤得歌體然其詞華而少實
如圖畫好女徒動人情在原中將之歌其情
有餘其詞不足如萎花雖少彩色而有薫香
文琳巧詠物然其體近俗如賈人之着鮮衣
宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾停滯如望
秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通姫之流
也然艶而無氣力如病婦之着花粉大友黒
主之歌古猿丸大夫之次也頗有逸興而體
甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者
不可勝數其大底皆以艶爲基不知歌之趣
者也俗人爭事榮利不用詠和歌悲哉々々

雖貴兼相将冨餘金銭而骨未腐土中名先
滅於世上適為後世被知者唯和歌之人而
已何者語近人耳義慣神明也昔平城
天子詔侍臣令撰万葉集自爾以来時歴十
代数過百年其後和歌棄不被採雖風流如
野宰相雅情如在納言而皆以他才聞不以
斯道顕
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外恵茂
筑波山之陰淵変為瀬之声寂々閉口砂長
為巌之頌洋々満耳思継既絶之風欲興久
廃之道爰詔大内記紀友則御書所預紀貫
之前甲斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬
生忠岑等各献家集并古来旧歌曰続万葉
集於是重有詔部類所奉之歌勒為二十巻

名曰古今和歌集臣等詞少春花之艶名竊
秋夜之長況哉進恐時俗之嘲退慙才芸之
拙適遇和歌之中興以楽吾道之再昌嗟乎
人丸既没和歌不在斯哉于時延喜五年歳
次乙丑四月十八日臣貫之等謹序

須原茂兵衛梓